

# 第4章 総括

## 1. 調査のまとめ

盛岡市教育委員会で行った令和2年度の細谷地遺跡発掘調査により、第3章に記載した内容の成果を得ることができた。以下、調査内容のまとめを行い、総括とする。

### 細谷地遺跡第41次調査

令和2年度に行った第41次調査区全体で検出された遺構は、近現代の廃棄土坑1基（RD935）のみであり、周辺でこれまで確認されていたような縄文時代の陥し穴群、古代の堅穴建物跡、近世の掘立柱建物跡などは確認されなかった。

〔近世〕 近現代廃棄土坑RD935より18～19世紀の近世陶磁器と金属製品が出土している（写真第3図版）。肥前染付の大皿・丸皿・小皿・輪花皿、瀬戸染付の角小皿・小皿、山蔭焼染付の碗・皿・湯呑・輪花皿、花古焼染付の手あぶり、備前京焼風陶器の鉢・皿、瀬戸美濃の綠釉鉢・灰釉壇、相馬大堀系の皿・湯呑、寺町焼の灰釉片口鉢・鉢・蓋・甕、花巻鍛冶町焼のなまこ釉鉢・甕などの破片が見られる。なお、山蔭焼、花古焼、寺町焼は盛岡市内、花巻鍛冶町焼は花巻市内に操業した地方窯である（盛岡市遺跡の学び館2010・2014、盛岡市教育委員会2019、花巻市博物館2004）。金属製品としては、煙管の雁首と吸い口が出土している。これらは幕末からの伝世品等が近現代に廃棄されたものと考えられる。

〔近現代〕 第41次調査区から近世陶磁器・金属製品及び近現代陶磁器類・ガラス瓶・ガラス製品・金属製品等が多量に廃棄された土坑状の遺構が1基（RD935）検出され、大多数の遺物を回収した。同様の遺構が周辺の第37・38・40次調査区より計34基検出されており、当該遺構を「廃棄土坑」と呼称している（盛岡市ほか2020・2021）。出土遺物の時期は明治・大正から昭和20年代に及ぶと考えられ（写真第4～19図版、第1～3表）、次項で内容を概観する。

## 2. 細谷地遺跡第41次調査出土の近現代遺物

### ①陶磁器類

#### 〔器種〕

廃棄土坑より出土した近現代陶磁器の器種は、飯茶碗（子ども用含む）、碗蓋、碗、湯呑、皿、洋皿、鉢、洋鉢、盃、徳利などがみられ、飯茶碗・湯呑・皿の個体数が圧倒的に多く、同じ装飾で組みとなっている物が多数ある。日用食器以外では、火入れ、手あぶり、仏具、通徳利、汽車土瓶などが出土している。

#### 〔装飾技法〕

近代以降の陶磁器における装飾技法の特徴には、合成釉薬の導入と多様な印刷技術の展開という二つの柱がある（長佐古真也2007）。廃棄土坑出土陶磁器の染付には発色の鮮やかな酸化コバルトが使用され、手描き染付のほか型紙刷、銅版刷、吹き絵、ゴム印判といった印刷技法、多色の上絵技法がみられる。明治～大正期に多用される精緻な文様の型紙刷・銅版刷の個体数が約半数を占める。子ども用飯茶碗の上絵に昔話や動物植物文様、女児・野球少年、歌詞などのほか、軍国調文様（日章旗・旭日旗、戦車、兵隊、有刺鉄線など）

がみられるのは、戦時下の世相を反映している（岐阜県現代陶芸美術館2016）。

また、ノベルティと考えられる「東京 菅沼」「亀屋商店」「木津屋醤油店」「岡寅」といった会社名や商店名が入った湯呑、皿、鉢のほか、「吉興酒店」「銘酒 日の丸」と店名と清酒銘柄の入った酒器としての湯呑がある。通徳利には「濱藤本店」「銘酒 岩手川」（仙北町と鉢屋町に酒蔵があった老舗酒造会社と銘柄、2006年廃業）の文字が大きく手描きされている。窯元や陶磁器メーカーの印銘としては、湯呑の「九谷」「不二陶器」、鉢の「喜祥」「泉山」、燭徳利の「西山精製」、洋皿の「日本陶器會社 NORITAKE」「東洋陶器會社」や紋章風マークがみられる。

#### 〔記念湯呑・軍盃〕

表彰の記念品と考えられる「老若男女勤儉誠行会 昭和二年三月十二日」と記された湯呑が出土している。また、盃に星マークや桜、日章旗・旭日旗が描かれ、「除隊記念」「工八 凱旋記念」の文字があるものは陸軍関係の軍盃（戦前における徴兵の除隊記念や連隊の凱旋記念などで配られた記念品の盃）、錨形マークや軍艦が描かれ、「佐工徵用記念」の文字があるものは海軍関係の軍盃と考えられる（「佐工」は佐世保海軍工廠か）。

#### 〔統制陶磁器〕

陶磁器の高台裏や底部に生産地組合ごとの生産地を表す文字（漢字一文字・二文字、カタカナ一文字）と生産者に与えられた数字を組み合わせたものが、ゴム印または型打ちによって付されているものがみられる。これは戦時下に生産統制を目的とした「統制番号（生産者別標示記号）」であり、昭和16年（1941）から終戦後の昭和21年（1946）頃までに限られるという。第41次調査出土資料にみられる生産地文字は、これまで細谷地遺跡で確認してきた「岐」（岐阜県東濃地区、美濃焼）だけでなく、「有」（佐賀県有田）、「瀬」「セ」（愛知県瀬戸）、「品」（愛知県品野）が新たに確認された。過年度も含め出土した陶磁器の統制番号の一覧は挿表2のとおりである。日用食器である磁器の飯茶碗・碗・湯呑・皿・鉢、記念品としての軍盃、そして代用陶磁器の鍋・化粧水瓶・化粧クリーム瓶などに付されている。全国の生産地の統制番号については財團法人岐阜県陶磁資料館2008、美濃焼（岐阜県陶磁器工業組合連合会（岐工連）傘下業者）の統制番号の一覧については桃井・萩谷・舟橋2010、統制番号の標示根拠・付与方法・期間の詳細は萩谷2013に詳しい。

細谷地遺跡では、遺跡の南東部から統制番号37種（52個体）が確認でき、内訳は「岐」（岐工連）32種（44個体）が圧倒的で、「瀬」「セ」（瀬戸）3種（6個体）、「品」（品野）1種（1個体）、「有」（有田）1種（1個体）である。昭和16年（1941）当時、美濃焼業者の組合連合である岐工連は傘下7組合に1,337業者が所属していた。同じ東海地区の瀬戸が1,137業者、品野が251業者、九州地区の有田が111業者であったことからすると、業者数が美濃に近い瀬戸の製品が少ないことが意外である。同じ東北地方の秋田県内で収集（古物商等から購入）された統制陶磁器の統制番号の集計でも、「岐」が多くを占めることが報告されている（庄内2010）。戦時下では生産のみならず流通も業界団体を通じた国家統制下にあり、消費地における統制陶磁器の产地組成は、生産地の生産力や伝統的な流通ルートに連動したものではなく、それらを排した全国的な一貫的配給体制の結果によるものと考えられ、意図的な地域差があるものと予想される。

なお、この統制番号のほかに「許」+5桁数字の標章記号が付されているものが4点ある。これは、上絵付け絵具による鉛毒中毒を防ぐ目的で公布された昭和11年（1936）内務省令第25号「飲食用器具取締規則中改正」に基づくものである（舟橋2015）。

#### 〔国民食器（厚口食器）〕

統制番号の付された食器の中に、厚手で口縁端部に緑色二重圈線を有する特徴的なものが4点あり、「国

民食器」（瑞浪市陶磁資料館2012）または「厚口食器（緑二重線入り食器）」（舟橋2015）と呼ばれている。これらは工場や病院などにおいて給食用食器として用いられたとされているが、近年東京都などでは旧日本軍施設の発掘調査でも出土している。統制番号からは岐阜県東濃地区、愛知県瀬戸地区の多くのメーカーが生産していたことが明らかとなっている。「国民食器」のデザインの起源は、大正9年（1920）に岐阜県瑞浪市「美濃窯業製陶（株）」が製糸会社から大量受注した給食用食器とされ、それが緑色二重圈線に社章を加えたものであった。これが「厚口食器（二本線筋入）」として製造権が「瀬戸、岐工連（西南部、瑞浪）」の組合に付与され、昭和9年（1934）の段階には圈線デザインが給食用食器のデザインとして広く認識されていたようである。「国民食器」は法制化されたものではなかったが、昭和16年（1941）以降多くのメーカーが生産しており、単純なデザイン（絵付けに特殊な器具や熟練工が不要で生産コストが低い）、色調が華美ではなく国防色に近い等の要因が時局に合致したと考えられている。なお、「国民食器」の語が一般的に文書で使用されるようになるのは昭和18～19年頃のようであるが、「国民食器」＝「緑色二重圈線食器」を示す資料は確認できず、それを理由に「厚口食器」の語が使用される場合がある。写真第10図版RD935No.363は、統制番号のある「国民食器」のデザインである一方、不釣り合いに西洋風の華美なバラが色彩豊かに絵付けされており、戦時下で生産された在庫の素地を流用して、戦後に上絵付けされた商品が存在した可能性が指摘されている（瑞浪市陶磁資料館2012）。なお、「国民食器」と同じデザインでも線が青色で「岩手醫專附属醫院」（現在の岩手医科大学附属病院）のマークがある写真第10図版RD935No.254は、「工場食器（病院食器）」として区別されるようである。

#### 〔代用陶磁器（陶磁器代用品）〕

戦時下の物資不足の中、金属やガラスの代用として陶磁器が使用された。調理用品では鍋、ヤカン（耐熱湯沸土瓶）、おろし金、化粧品容器では化粧水瓶、化粧クリーム瓶・蓋が出土している。陶磁器代用品の時代背景、成立・発展に係る政策や産地・製品の事例は萩谷2017に詳しい。

陶磁器業界では、昭和12年（1937）の日中戦争勃発以降、悪化した国際関係の影響から輸出不振となっていた。そこで、金属類の消費節約の動向から、代用として陶磁器が脚光を浴びるに至ったのを好機と捉え、不況打破の活路を見出そうとしていた。全国組織である日本陶磁器工業組合連合会（日陶連）は昭和13年（1938）7月に「指定代用品」を規定して製造者を登録、製品を検査し、自らも開発研究にあたるなど、国策である代用品普及事業に陶磁器業界として積極的に対応した。特に、第11図版RD935陶器No.018の鍋やNo.019のヤカンといった直接火にかける代用品については材質から研究開発され、耐熱試験を行っており、戦後のガス火でも使える土鍋の基になった。昭和16年（1941）11月以降は、国による計画生産により各業者における製造品種や数量の自主的選択は失われ、国（日陶連）認定製品に限り製造が許可された。

流通においても、昭和17年（1942）5月に「新興陶磁器配給統制株式会社」が日陶連と指定商人の共同出資により設立され、飲食容器とは別に、一括して市場への配給の調整が図られた。この影響を大きく受けたのが化粧品業界であった。本来のガラス製の化粧品容器は、資材・燃料不足により生産が縮小され、陶磁器容器が注目された。袋物である陶磁器容器は、徳利と同じ技法（合わせ型・鋳込み型を使用）で製造されていた。当初「指定代用品」であった化粧品容器は、計画生産の実施段階で、金属の代用品ではないという理由で「一般品」として75%減産されることとなり、業界団体の日陶連への陳情により、クリーム、ポマード、歯磨用については「指定代用品に準ずる」となった。しかし、陶磁器容器類の公定価格が低廉に設定され窯元の採算が不利となったことから、新興陶磁器配給統制株式会社との交渉により、価格は公定価格基準簿最高額での取引、さらに希望数量の20%（のちに50%）の保証金（前渡し金）支払いにより、化粧品容器の増

産が図られることになったという。

#### 〔磁器製品〕

磁器製品として、電気器具の一部である電球ソケットやコンセント、ボタン、タンス形の玩具などが出土しているが、ボタンは上記の代用陶磁器の一つかもしれない。昭和18年（1943）度の金属類特別回収の実施項目に制服の金ボタン回収運動があり、学生のほか官公庁の制服も対象となり、代用品として陶磁器や木製のボタンが用意されたという。昭和16年（1941）には既に金属回収の代用品として陶磁器製ボタンが登場しており、昭和18年（1943）の美濃では学生ボタン以外に四つ穴の作業ボタンも大量生産されていたという（萩谷2017）。

#### ②ガラス瓶

遺跡から出土するガラス瓶を考古遺物として調査・分析する意義や手法については、『ガラス瓶の考古学』（桜井2006、2019増補）を参考とし、その分類も基本的に準拠している。個々のガラス瓶の詳細や年代は観察表のとおりであるが、特徴的な資料について以下に記述する。

#### 〔酒瓶〕

■ビール瓶：明治維新直後から日本国内でもビール醸造が開始されていたが、国産ビール瓶の製造は明治22年（1889）の有限責任品川硝子会社により始まるとされ、「人工吹き」と呼ばれる職人の手によるものであった。写真第12図版001は、国産初期のビール瓶であり、瓶の形は「なで肩」で、底はキックアップというワイン瓶のような上げ底となっている。口縁部は欠損しているが、コルク栓で口のつくりは平面的であったと考えられる。これと全く同形の瓶が写真第20図版参考資料1であり、大日本麦酒「エビスピール」（輸出用）のラベルが貼られている。現在のような王冠栓のビール瓶は、明治33年（1900）の「東京ビール」（東京麦酒株式会社）に始まる（写真第20図版参考資料3、東京麦酒は明治40年に大日本麦酒に吸収合併）。写真第12図版002は、大日本麦酒株式会社の自動製瓶機による褐色ビール瓶で、瓶の形は「いかり肩」。大阪麦酒（アサヒ）、日本麦酒（エビス）、札幌麦酒（サッポロ）が明治39年（1906）合併、当時の市場占有率が約7割であった（端田2016）。大正9年（1920）にはオーエンス式自動製瓶機の特許権を持つ日本硝子工業を合併して製瓶の近代化を進め、大量生産が確立された（川島2013）。戦後の昭和24年（1949）に朝日麦酒（現アサヒビール）と日本麦酒（現サッポロビール）に分割された。第12図版003は、麒麟麦酒株式会社の褐色ビール瓶であり、瓶の形は「なで肩」。明治3年（1870）にアメリカ人ウィリアム・コープランドが横浜に開設したスプリングバレー・ブルワリーを引き継いで明治18年（1885）に設立されたのが外国資本のジャパン・ブルワリー・カンパニーであり、その銘柄が「キリンビール」（販売は明治屋、第20図版参考資料2）であった。それを継承して明治40年（1907）に日本資本の麒麟麦酒株式会社が設立され、現在に至る。その後、大正2年（1913）に帝国麦酒株式会社（サクラビール、写真第12図版004）、大正11年（1922）に日本麦酒鉱泉株式会社（ユニオンビール、写真第12図版005）などが設立され、販売も健闘したが、昭和初期には大日本麦酒に吸収合併され、戦時下となった。

写真第13図版006～008は、アメリカ製ビール瓶。昭和20年（1945）8月に終戦を迎えると、戦勝国のアメリカ軍が日本の軍事占領のため進駐した。第二次世界大戦末期、アメリカ軍は戦線にビールを船で運ぶのに省スペースで軽量なワンウェイ（使い捨て）瓶を使用しており（Peter Schulzほか2019）、進駐軍がそれらを戦後日本に持ち込んだと考えられる。当時物資不足であった日本では、本来は強度がないワンウェイ瓶が回収・転用され、全く別のラベルと中身で流通していたことがわかっている（桜井2006）。

■清酒瓶：明治の初めまで、清酒は写真第9図版RD935陶器No.022のような通徳利を使用した量り売りが庶民では基本であった。明治11年（1878）には瓶詰め酒が初めて売り出され、明治36年（1903）頃には1升、4合、2合、1合など瓶詰め清酒が多彩になり、清酒にガラス瓶の使用が一般化するようになった。写真第13図版010・011のように初期の清酒瓶は「人工吹き」であり、当初はコルク栓（011）であったものが明治40年（1907）頃から機械栓（010）に移行した。写真第13図版009のような機械製瓶機による1升瓶の大量生産が始まったのは大正13年（1924）。大阪の徳永硝子製造所は、アメリカのハートフォード社に交渉して特別注文した製瓶機で1升瓶の製造に成功、大型瓶用の自動製瓶機の開発は当時画期的なことであった。

#### 〔清涼飲料瓶〕

■サイダー瓶：第13図版012は金線飲料のサイダー瓶（完形品は第20図版参考資料4）。「金線サイダー」は日本で初めて本格的に流通したサイダーであり、横浜の秋元巳之助が、炭酸水にリンゴのフレーバーをつけて販売。以前にあった「シャンパンサイダー」がパイナップルとリンゴのフレーバー由来であったことから、「シャンパン」の語を除いた「サイダー」という商品名にしたとされている。アメリカのウィリアム・ペインターが発明した王冠栓を明治37年（1904）に日本で初めて採用した。金線飲料の設立は大正4年（1915）、大正14年（1925）には日本麦酒鉱泉と合併している。写真13図版013は合併後の瓶であり、当時は三ツ矢サイダーと兄弟銘柄として併売された。第14図版014は、昭和3年（1928）に発売された麒麟麦酒「キリンレモン」の無色透明瓶。

■みかん水瓶・ニッキ水瓶：写真第14図版015は、みかん水瓶の三段形の胴部。みかん水とは、みかんの皮から絞った香油で風味をつけた無果汁の飲料水。駄菓子屋・雑貨店のほか、祭りの露店などでも売られていた。015は後述するニッキ水瓶に類似した形状だが、ガラスがより厚手で大きい。第20図版参考資料5は類似した三段形の完形品であり、葉付みかんの形状となっている。ボトルネックが際立って長いものが多く、冷水のバケツにつけても口から水が入らず、取り出しやすいように進化したといわれている（平成ボトルクラブ2017）。第14図版016はニッキ水瓶。ニッキ水とは、「肉桂」という木の樹皮を乾燥した香辛料で風味をつけた飲料水で、主に駄菓子屋で子ども向けに販売されていた。ボトルネックがより細長く、少しづつ飲むようになっていた。

#### 〔乳製品瓶〕

■牛乳瓶：牛乳容器は、明治22年（1889）に東京の津田牛乳店が初めてガラス瓶を採用してからそれが普及し、明治33年（1900）には法令でガラス瓶が義務付けられる。写真第14図版017・018は初期の牛乳瓶で、「人工吹き」で底にキックアップがあり、淡青色透明、紙栓またはコルク栓であったと考えられる。写真第14図版019は「三坊詰」（3デシリットル詰め=300ミリリットル詰め）と陽刻があり、当時としては大型の牛乳瓶である。昭和2年（1927）には無色透明瓶と王冠栓が義務化となる。写真第14図版020は昭和初期頃の牛乳瓶であり、「北辰社」と陽刻がある。明治維新後、江戸幕府を支えてきた幕臣は静岡に移封され、諸大名の江戸屋敷も廃止されたため、新都東京の中心部は廃墟となっていた。それらは武士の失業対策もかねて払い下げられ、酪農の牧場として利用された。明治6年（1873）には、都心部に7軒の牧場があったという。その一つが飯田橋にあった「北辰社」であり、榎本武揚（幕府留学生としてオランダへ3年間留学、箱館戦争で降伏後、新政府で北海道開拓使などを歴任）の所有であった。明治32年（1899）に蒸気による殺菌牛乳が販売されるようになると、東京第一の北辰社牛乳の衛生さを宣伝する新聞広告を出している。飯田橋には現在「北辰社牧場跡」の記念碑があり、牛乳販売店（創業明治4年）も千代田区九段南に業務用乳製品卸として現存している。写真第14図版021は胴部断面四角形の牛乳瓶で、「一合」「一八〇瓦」（180グラム=180ミリリットル）と陽刻

があり、全く同型の完形瓶が第37次調査RD902から出土している（盛岡市・盛岡市教育委員会2020）。

#### 〔調味料瓶〕

■カレー粉瓶：調味料としてのカレー粉は、インドを植民地としていたイギリスのクロス&ブラックウェル社が18世紀末に「C & B カレーパウダー」というスパイスの粉の調合品を販売したことに始まり、これを使ったカレー料理がヨーロッパ中に広まっていた。このC & B社のカレー粉がイギリスから輸入されるようになるのが明治20年（1887）頃で、明治末には日本式の「ライスカレー」を食べさせる洋食レストランが普及した。山崎峯次郎は東京に「日賀志屋」を創業（現エスビー食品）、昭和5年（1930）に「ヒドリ印カレー粉（家庭用）」を発売、翌年にはヒドリ印に「S & B」を併記し商標とした。写真第15図版022はそのカレー粉瓶。国産カレー粉が普及した一方、日中戦争の勃発により昭和13年（1938）にスパイスの輸入制限が始まると、昭和14年（1939）に原料獲得のため「関東カレー工業組合」（会長 山崎峯次郎）が結成されており、写真第15図版023はその組合指定の共通瓶であるが、気泡が多く雑な作りである。昭和初期までは写真第15図版024のような首が長く平たい家庭用カレー粉瓶が多く、イギリス製のマスタード瓶にヒントを得たと言われ、三味線のバチに似ていることから「バチびん」とも呼ばれていた（石川県能登島ガラス美術館2009）。同様の形状のガラス瓶が第37次調査RD902から出土している（盛岡市・盛岡市教育委員会2020）。

#### 〔食品瓶〕

■金平糖瓶：写真第15図版025は、大正末期から昭和初期にかけて子ども達に大人気だった「菓子入り玩具瓶」。金平糖が入ったガラス瓶のことで、名前のとおり金平糖を食べ終わったあとは、玩具（おもちゃ）として遊べるデザインとなっていた（ただし金平糖は当時の高級菓子）。025は女児向けのダイヤマークの並ぶ水筒形であるが、そのほか鉄砲、飛行機、自動車、楽器などさまざまな形があった（平成ボトルクラブ2017）。

#### 〔薬瓶〕

■医療用薬瓶：写真第15図版028～032は、病院での処方薬の容器で、無色透明、薄手で軽いのが特徴。胴部には目盛線があり、病院名の陽刻またはラベルを貼る区画が見られる。028の「日本赤十字社岩手支部病院」は現在の盛岡赤十字病院の大正9～昭和17年（1915～42）の名称である。

■一般用薬瓶：市販薬の容器で、多種多様な色と形があった。写真第16図版033にある「ZENKOREN」（全購連）とは、大正12年（1923）に創立された「全国購買組合連合会」であり、戦後に農協の購買部門の全国組織として再発足（現在の全国農業協同組合連合会）。上部の桜マークには「共存同榮」の文字がデザインされており、中身はビタミンなどの栄養剤が入っていたようである。

■軟膏瓶：写真第16図版035は塗り薬「メンソレータム」の瓶。メンソレータムは19世紀にアメリカ実業家アルバート・ハイドが考案したもので、日本では滋賀県近江八幡を拠点に実業家・建築家として活躍していたウィリアム・メレル・ヴォーリズが、旧知の縁で販売権を取得。大正9年（1920）に近江セールズ株式会社を設立して輸入販売が開始された（昭和49年まで継続、その後はロート製薬が販売）。

■目薬瓶：写真第16図版037・038は「目薬 精皓水」と陽刻のある断面円形の目薬瓶。明治4年（1871）発売の西洋式目薬である岸田吟香薬房「精錡水」の模倣品と考えられる。当時は毛筆で薬液を滴下していた。写真第16図版036は「目薬 上池液」と陽刻のある断面横長八角形の目薬瓶。ガラス管スポットを収納できるよう瓶の一角が凹んでおり、明治30年（1897）発売「大學目薬」の瓶形状に類似しており、大正期に普及した形状である。写真第16図版039は昭和初期に始まる滴下式両口点眼瓶（瓶とスポットが一体化）。目薬瓶の上部にゴム部品をはめ、それを押すと薬液が出る設計であった。目薬の変遷についてはウェブサイト「一般社団法人北多摩薬剤師会／薬と歴史シリーズ」に詳しい。

### 〔化粧瓶〕

■**白粉瓶**：西洋風化粧が一般に普及したのは明治後期からで、大正時代以降は自然な化粧法が進み、白粉も白一色から有色へ、練白粉から粉白粉へと変わっていった。写真第16図版041は、大阪の脇田盛眞堂から明治25年（1892）頃発売された「花王白粉」。脇田盛眞堂は白粉の製造元であるとともに、有力な化粧品問屋であり、新聞広告も盛んであった。写真第16図版042のようなガラス栓の広口小型瓶は、大正～昭和初期の白粉瓶と考えられる。

■**化粧水瓶**：堀越嘉太郎商店「ホーカー液」（写真第17図版043）、平尾賛平商店「レートフード」（写真第17図版044）、橋本ケミカル「薬液ハルナー」（第17図版045）のほか、資生堂の商標である花椿マークの陽刻のある化粧水瓶（写真第17図版046）がみられる。

■**化粧クリーム瓶**：白色不透明または乳白色半透明な瓶色が多い。平尾賛平商店「レートクレーム」（写真第17図版047・048）、資生堂「乳白クリーム」（写真第17図版049）、資生堂「コールドクリーム」（写真第17図版050）、「ケンシ若肌クリーム」（写真第17図版051）、「ウテナミルククリーム」（写真第17図版052）がみられる。瓶色が濃紫色不透明の写真第17図版053・054は原料不足であった戦時下～終戦直後の化粧瓶であろうか。

■**ポマード瓶**：白色不透明または乳白色半透明な瓶色のほか、透明瓶等もある。井田京栄堂「メヌマポマード」（写真第18図版055）などがみられる。化粧クリーム瓶と同様に、瓶色が濃紫色不透明の写真第18図版056は戦時下～終戦直後のものとみられる。

■**歯磨粉瓶**：大手衛生用品メーカーであるライオン株式会社は、明治24年（1891）創業の小林富次郎商店を祖とし、明治29年（1896）に粉歯磨き「獅子印ライオン歯磨」を発売、明治44年（1911）に金属チューブ入りの「ライオン練歯磨」を発売。石鹼部門を分離して大正7年（1918）に株式会社小林商店が設立され、昭和9年（1934）に発売されたのが写真第18図版058の「潤製ライオン歯磨」である。粉歯磨きの欠点（飛び散る、むせる）を改善したものであった。昭和16年（1941）2月の新聞広告には「翼賛一家へ 国策容器（うつくしいがらすびん）の潤製歯磨きを！」「容器は見るから感じのよい紫水晶色の硝子壇」とあり、058の瓶色と一致する表現である。戦時下の新聞広告についてはウェブサイト「東京湾要塞 三浦半島・房総半島戦争遺跡探訪／軍事文物」に詳しい。

### 〔文具瓶〕

■**インク瓶**：当初、万年筆のインクは高価な海外からの輸入品に頼っており、明治時代中頃から丸善が国産のインク製造を開始した。写真第18図版059は背が低く細口の首が瓶の端から出ている「くつ形瓶」で、イギリス形インク瓶を真似たものとされている。写真第18図版060標準的な形状の小型インク瓶。写真第18図版061は角形の「セーラーダイヤインキ」、写真第18図版062は「サンエスインキ」、写真第18図版063は底面に「〈SIMCOマーク〉」のある篠崎インキ製造「ライトインキ」である。

### 〔日常生活瓶〕

■**染料瓶**：雪輪化工「ゆきわ染」（写真第19図版068）、桂屋「みやこ染」（写真第19図版069～071）は家庭用絹維染料の瓶、写真第17図版072は増井商店の食紅の瓶である。

### ③ガラス製品

#### 〔ガラスコップ〕

■**アンカーコップ**：島田硝子製作所（現 東洋佐々木ガラス）が昭和13年（1938）に食料品缶詰代用の容器

として製造を開始した再生ガラスのコップで、生産統制下で不足していたブリキの代用として大量に使用された。「〈CANマーク〉」は島田硝子の商標、「アンカー3号」はコップのサイズのようである。当時貼られていた紙ラベルが残るものもあり、食料品だけでなく歯磨粉の販売容器としても使用されていた（佐野宏明2019）。

### ③廃棄土坑のガラス瓶の組成

細谷地遺跡第41次調査RD935廃棄土坑から出土したガラス瓶の個体数は、写真掲載と台帳登録したもの（概ね完形または完形まで復元でき分類が可能なもの）の合計で143点を数え、廃棄土坑1基あたりの出土数は細谷地遺跡南東部35基の中で最多である。年代的には明治時代～昭和20年代にまとまる資料であり、種類別に集計したのがグラフ1である。薬瓶と化粧瓶で5割強を占める一方、酒瓶・清涼飲料瓶・乳製品瓶・調味料瓶・食品瓶という飲食系の瓶と、文具瓶・日常生活瓶の比率が拮抗している。これまで第37・38・40次調査で出土したガラス瓶合計462点（明治時代～昭和50年代）の組成であるグラフ2と比較すると、第41次調査RD935は飲食系の瓶の比率が低く、文具瓶・日常生活瓶の比率が高い。全体の傾向としては、盛岡市・盛岡市教育委員会2021で指摘したように、都市近郊農村部のガラス瓶組成の中にあるようだが、種類別の違いは廃棄個体数の違いによる誤差や、ガラス瓶を廃棄した各世帯のライフスタイル・嗜好の違いを反映していると考えられる。

### 謝辞

戦時下の陶磁器について、多治見市美濃焼ミュージアム（旧岐阜県陶磁資料館）、瑞浪市陶磁資料館より展示図録及び研究紀要を当館に提供いただいた。記して感謝申し上げる。

### 【引用・参考文献】

#### ■近世陶磁器関係

花巻市博物館 2004『花巻市博物館常設展示図録』

盛岡市遺跡の学び館 2010『第9回企画展「もりおかで焼かれた“やきもの”－セトモノから煉瓦まで－」図録』

盛岡市遺跡の学び館 2014『開館10周年特別展「もりおか発掘物語」図録』

盛岡市教育委員会 2019『平成28・29年度盛岡市埋蔵文化財調査報告書 山蔭焼窯跡－市営上水道管敷設工事等に伴う緊急発掘調査－』

#### ■近現代陶磁器関係

岐阜県現代陶芸美術館 2016『セラミックス・ジャパン 陶磁器でたどる日本のモダン』図録

財団法人岐阜県陶磁資料館 2008『萩谷コレクション 全国の戦時中のやきもの』図録

財団法人岐阜県陶磁資料館 2001『特別展 戦時中の統制したやきもの』図録

庄内昭男 2010『陶磁器から見た昭和時代の秋田－秋田県内発見の統制陶磁器を中心として－』『秋田県立博物館研究報告第35号』

長佐古真也 2007『続・お茶碗考－近代・現代の中形碗に飯碗を探る－』『考古学が語る日本の近現代』同成社

萩谷茂行 2013『統制経済下における陶磁器製品製造、流通の一考察～いわゆる「統制番号」に関する検証～』『瑞浪市歴史資料集第2集』瑞浪市陶磁資料館

萩谷茂行 2017『陶磁器代用品の誕生と発展』『瑞浪市歴史資料集第4集』瑞浪市陶磁資料館

舟橋 健 2015 「番号の付けられたやきもの～紀年銘のある製品と瑞浪の製品にみられる特徴～」『瑞浪市歴史資料集 第3集』瑞浪市陶磁資料館

瑞浪市陶磁資料館 2012 『番号の付されたやきもの 戦時下の瑞浪窯業生産』図録

桃井勝・萩谷茂行・舟橋健 2010 「伝世品にみる戦時中の美濃焼～産地と製品傾向～」『瑞浪市陶磁資料館研究紀要第13号』

#### ■ガラス瓶関係

石川県能登島ガラス美術館 2009 『企画展 ガラスびん展－時代をうつすガラスたち－』図録

川島智生2013 『アサヒビール所蔵資料でたどる近代日本のビール醸造史と産業遺産』淡交社

神原雄一郎2011 『盛岡の地中から発見されたガラス瓶 明治から昭和にかけてのガラス瓶』盛岡市遺跡の学び館

麒麟麦酒株式会社 1967 『麒麟麦酒株式会社五十年史』

キリンビール編1984 『ビールと日本人 明治・大正・昭和ビール普及史』三省堂

キリンビール株式会社2017 『図説 ビール』河出書房新社

桜井準也 2004 『モノが語る日本の近現代生活－近現代考古学のすすめ－』慶應義塾大学教養研究センター選書

桜井準也2006 『ガラス瓶の考古学』六一書房 (2019増補)

佐野宏明編 2019 『モダン图案 明治・大正・昭和のコスメチックデザイン』光村推古書院

庄司太一 1997 『びんだま飛ばそ』パルコ出版

杉並区立郷土博物館分館 2009 『企画展「硝子壠の残像－ガラスびんに映った杉並の風景－」展示図録』

大日本麦酒株式會社 1936 『大日本麦酒株式會社三十年史』

端田晶 2016 『ぶはっとうまい～日本のビール面白ヒストリー 大日本麦酒の誕生』雷鳥社

平成ボトルクラブ監修2017 『日本のレトロびん』グラフィック社

盛岡市遺跡の学び館 2019 『令和元年度テーマ展「透きとおった記録－ガラスにみる明治・大正・昭和－」展示解説資料』

盛岡市・盛岡市教育委員会 2020 『盛南地区遺跡群発掘調査報告書XII－道明地区土地区画整理事業関連遺跡平成29年度発掘調査－ 細谷地遺跡』

盛岡市・盛岡市教育委員会 2021 『盛南地区遺跡群発掘調査報告書XIII－道明地区土地区画整理事業関連遺跡平成30・

令和元年度発掘調査－ 細谷地遺跡』

山本孝造1990 『びんの話』日本能率協会

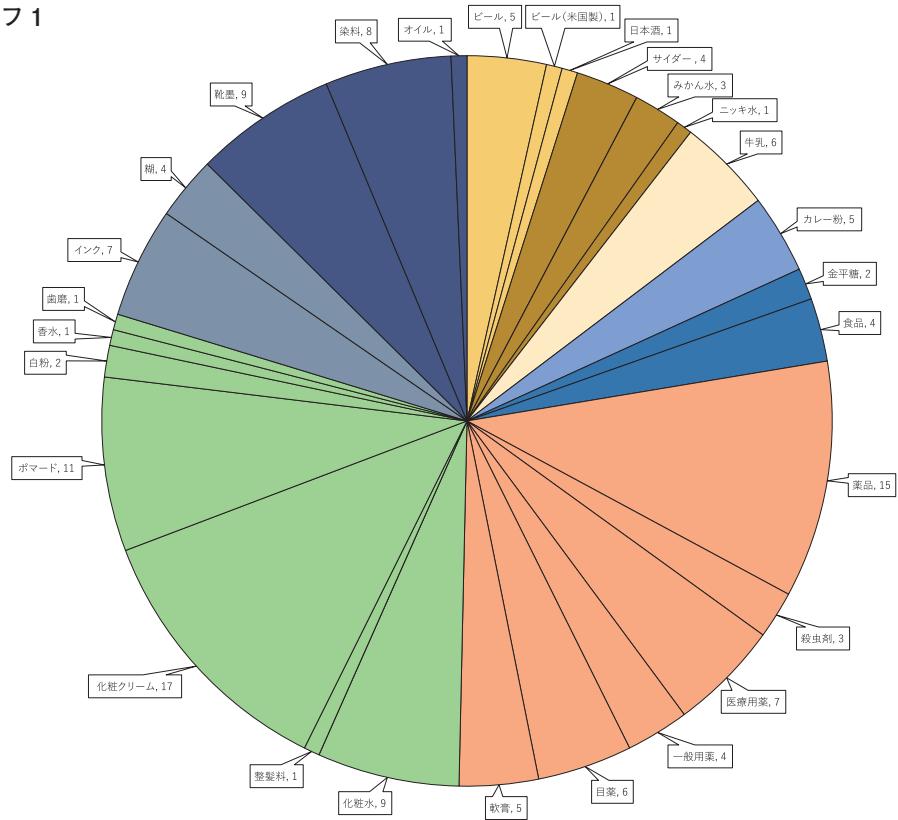
Peter Schulz, Bill Lockhart, Carol Serr, Bill Lindsey, and Beau Schriever 2019 “A History of Non-Returnable Beer Bottles”

插表2 細谷地遺跡出土近現代陶磁器統制番号一覧（昭和16～21年）

番号	所属組合	印字種別・色	種別	器種	絵付等	絵柄等	その他特徴	揃数	調査次数	遺構名	台帳番号	発掘報告書	写真図版
岐 91	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	飯茶碗	染付・吹き絵	富士山		1	37	RD904	No.013	2020盛南12	第36図版
岐 124	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	碗	鉄釉	黒一色		1	37	RD905	No.012	2020盛南12	第36図版
岐 620	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陰刻	磁器	湯呑	上絵	草花文		1	37	RD912	No.055	2020盛南12	第36図版
岐 710	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	インク瓶か	不明	不明	代用品	1	37	RD903	No.051	2020盛南12	第36図版
岐 955	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陰刻	陶器	鍋	鉄釉	黒一色	代用品	1	37	RD903	No.044	2020盛南12	第36図版
岐 1098	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陰刻	磁器	皿	染付・ゴム印判	草文		1	37	RD904	No.028	2020盛南12	第36図版
番号	所属組合	印字種別・色	種別	器種	絵付等	絵柄等	その他特徴	揃数	調査次数	遺構名	台帳番号	発掘報告書	写真図版
岐 172	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	皿	釉下彩・ゴム印判	梅花文		1	38	RD903	No.036	2021盛南13	第11図版
岐 452	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	湯呑	染付・ゴム印判	松鳥文		1	38	RD903	No.037	2021盛南13	第11図版
岐 672	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陰刻 (鏡文字)	磁器	化粧 クリーム瓶	白磁	裏印「(ウテナ マーク)」	代用品	1	38	RD916	No.052	2021盛南13	第11図版
岐 (不明)	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	飯茶碗	染付・吹き絵	草木文		1	38	RD903	No.003	2021盛南13	第11図版
番号	所属組合	印字種別・色	種別	器種	絵付等	絵柄等	その他特徴	揃数	調査次数	遺構名	台帳番号	発掘報告書	写真図版
岐 932	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	丼碗	上絵	草花文十 幾何文		1	40	RD931	No.011	2021盛南13	第19図版
岐 945	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	丼碗	上絵	草花文十 幾何文		1	40	RD931	No.012	2021盛南13	第19図版
番号	所属組合	印字種別・色	種別	器種	絵付等	絵柄等	その他特徴	揃数	調査次数	遺構名	台帳番号	発掘報告書	写真図版
岐 31	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	飯茶碗 (子ども用)	染付・手描き	果実文		1	41	RD935	No.163	2022盛南14	第9図版
岐 40	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	飯茶碗	染付・ゴム印判	風景文		2	41	RD935	No.152	2022盛南14	第9図版
岐 91	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	飯茶碗	染付・吹き絵	風景文		3	41	RD935	No.154	2022盛南14	第9図版
岐 95	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	飯茶碗	釉下彩・吹き絵	富士山文		3	41	RD935	No.157	2022盛南14	第9図版
岐 109	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	飯茶碗 (子ども用)	上絵	草花文		1	41	RD935	No.168	2022盛南14	第9図版
岐 143	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・緑色	磁器	碗	染付	緑色二重線 「ヤマカ陶器」	国民食器	1	41	RD935	No.170	2022盛南14	第10図版
岐 201	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	軍盃	上絵	軍艦文	鉄兜形	1	41	検出面	No.009	2022盛南14	第10図版
岐 304	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	飯茶碗 (子ども用)	上絵	縞状文+花文		1	41	RD935	No.165	2022盛南14	第9図版
岐 318	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	皿	染付・ゴム印判	風景文		5	41	RD935	No.366	2022盛南14	第10図版
岐 326	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・緑色	磁器	皿	上絵	花木文	許27272	1	41	RD935	No.364	2022盛南14	第10図版
岐 343	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・緑色	磁器	飯茶碗 (子ども用)	上絵	花文		1	41	RD935	No.166	2022盛南14	第9図版
岐 381	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	湯呑	染付・ゴム印判	松竹梅文		3	41	RD935	No.490	2022盛南14	第10図版
岐 391	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・緑色	磁器	湯呑	染付	緑色二重線	国民食器	1	41	RD935	No.487	2022盛南14	第10図版
岐 406	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	碗	染付	緑色二重線	国民食器	1	41	RD935	No.171	2022盛南14	第10図版
岐 452	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・青色	磁器	湯呑	染付・ゴム印判	松鳥文		2	41	RD935	No.488	2022盛南14	第10図版
岐 488	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	皿	染付・ゴム印判	風景文		1	41	RD935	No.365	2022盛南14	第10図版
岐 682	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	化粧 クリーム瓶	無釉	なし	代用品	1	41	RD935	No.564	2022盛南14	第10図版
岐 779	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・緑色	磁器	化粧水瓶	白磁	なし	代用品	1	41	RD935	No.558	2022盛南14	第10図版
岐 870	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	化粧 クリーム瓶	褐色釉	なし	代用品	1	41	RD935	No.561	2022盛南14	第10図版
岐 1056	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陰刻	磁器	洋鉢	上絵	果実文	許27280	1	41	RD935	No.406	2022盛南14	第10図版
岐 1077	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陰刻	陶器	塊	オリーブ色釉	なし		1	41	RD935	No.026	2022盛南14	第9図版
岐 1163	岐阜県陶磁器工業組合連合会	染付・緑色	磁器	飯茶碗	染付・手描き	縞状文		1	41	RD935	No.151	2022盛南14	第9図版
岐 (不明)	岐阜県陶磁器工業組合連合会	陽刻	磁器	洋鉢	上絵	不明	許27285	1	41	RD935	No.407	2022盛南14	第10図版
有 48	有田陶磁器工業組合（佐賀県）	染付・青色	磁器	飯茶碗	染付・手描き			1	41	RD935	No.151	2022盛南14	第9図版
瀬 526	瀬戸陶磁器工業組合（愛知県）	染付・青色	磁器	飯茶碗	染付・ゴム印判	花文		4	41	RD935	No.146	2022盛南14	第9図版
瀬 253	瀬戸陶磁器工業組合（愛知県）	染付・青色	磁器	皿	染付+上絵	緑色二重線 花文	国民食器	1	41	RD935	No.363	2022盛南14	第10図版
セ 934	瀬戸陶磁器工業組合（愛知県）	陰刻	陶器	鍋	鉄釉	なし	代用品	1	41	RD935	No.018	2022盛南14	第11図版
品 123	品野陶磁器工業組合（愛知県）	陰刻	磁器	小鉢	上絵	木葉集合形		1	41	RD935	No.405	2022盛南14	第10図版

## 細谷地遺跡第41次調査RD935出土近現代ガラス瓶（143点）【明治・大正～昭和20年代】

## グラフ 1



細谷地遺跡第37・38・40次調査出土近現代ガラス瓶（462点）【明治・大正～昭和50年代】

## グラフ2

